



社団法人

海外と文化を交流する会

(社) 海外と文化を交流する会会報

2007年4月発行(3ヵ月1回発行)

第34号

”知と心”の繋がりに文化の原点を求めて

●日本を理解し日本で学ぶ留学生への支援 ●貧しい国々での医療活動を支援 ●各国大使館との協力などによる文化講演会の主催



橋本明治「桜花」——この作品は30年前に、(社)海外と文化を交流する会によってオーストラリアに寄贈された25人の巨匠による日本画のうちの1点。強い線描による明快な形そして鮮やかな色彩で彩られた作風は、独特の美をほこる。1904年島根県生まれ、1971年日本芸術院会員、1974年文化勲章受章、1991年に亡くなった。この画は文化勲章を受章した後に描かれた。

室井前会長を寿ぐ

■室井鐵衛先生の卒寿を祝い、前会長に贈る言葉

ジョージ・W・ギッシュ (社) 海外と文化を交流する会会長

室井鐵衛先生

9年間の会長篤く御礼申し上げます



長年の「海外と文化を交流する会」の会長を務めた室井先生にお祝いの言葉を申し上げます。先生のご指導の下でこの会の新しい展開ができたことを感謝しています。その指導の特長は、人間性に溢れ、上下関係を無くして全ての会員が同じレベルで関わる事ができるようになったことが重要な改革でした。

例えば、毎月の企画委員会では、理事も他の会員も共にこの会の運営に参加できたことがこの会の特徴となってきました。先生が築いたこの体制をこれからも大切に継続していきたいものです。

加えて、先生の人生観と歴史観に大きな感銘を受け、さまざまなことを教えられました。特に戦前中の体験からの鋭い観察力と戦争責任への反省等の真理追究を一環とした態度は、同じ年代にはめったにみられません。先生のマスメディアや新聞への批判はその正義感から来るのではないかといつも感心していました。

先生のような日本人、否、地球人がもっていることによって、本当の『海外と文化を交流する』ことが可能になると信じています。室井先生、いろいろありがとうございます。先生の卒寿を心からお祝いをいたします。これからもこの会のためにご指導とお力をお与えくださるようお願いいたします。

■室井先生と共に歩んだ20年

松岡裕子 (社) 海外と文化を交流する会専務理事

室井先生との出会いは1986年3月15日のことです。前川誠郎国立美術館長をお迎えして「ゴッホと鴎外の関係」についての懇話会を催したときに、故西山由高理事の大切なゲストとしておみえになったのが最初でした。その後、理事、常務理事、会長をお引き受けいただき、実に20年間もの歳月、当会と苦楽を共にしてくださったのでした。

先生のお人柄を一言で表現するなら稀に見る「美しい日本人」だと思います。(故伊集院功理事はバサッと端的に「上等な日本人」と評しておられました)

今年39周年を迎える当会も、今日までには幾多の紆余曲折がありました。過去に某社と組んでいた時期がありますが、会本来の原点から遠ざかっていく危機にさらされて、やむなく独立独歩を決断する羽目になった困難なときに、先生は終始落ち着いて、立派に再出発の水先案内役を担ってくださったのです。このとき、

私は柔和で穏やかな室井先生が持つ勇氣、信念、実行力、品格というものを、こころで感じ取ることができた思いがしました。

晴れの日も、あらしの日々も先生と共に歩めた幸いを、こころ静かに噛みしめております。

■祝卒寿

大谷俊介（社）海外と文化を交流する会常務理事

当会名誉会長、室井鐵衛先生の卒寿を喜び心よりお祝申し上げます。

室井先生は高い学識と識見をお持ちになり、透徹した歴史観に基づいた社会状況に対する深い洞察力をお持ちで、会員からの尊敬を集め昨年までの10年間を会長として当会を導いてくださいました。そして、古き良き時代の慶応ボーイらしくハイカラでダンディで、当会の近代化を促すのに多大な貢献を与えてくださいました。

私は仕事仲間の中ではすでに長老扱いされる身となりましたが、兵隊経験もお持ちでその後の実り多き人生を歩まれてきた室井先生の前では鼻たれ小僧同然です。その温かなお人柄と卓越したご意見を見聞きする機会を重ねるたびに尊敬の念を深めてまいりました。どうぞいつまでもお元気で、当会の良心としてこれからもご指導くださることを願っております。

■大きな励まし

角谷多美子（社）海外と文化を交流する会理事

室井先生——笑顔を決やさず、いつも明るく、おおらかにみんなをリードしてくださり、一人一人を大切にしてくださいませ。私たちが今まで活動を続けてこられたのも、昨年、長年の念願だったオーストラリアでの日本画展を成功裏に開催することができたのも、先生が励まし続けてくださったことが大きな力になっていたと思います。

20数年前、会がはじめて開いた講演会でお目にかかったのが始めでした。初期の会報での小塩節先生との対談が心に残っております。それ以来、含蓄のあるお話を伺うのをいつも楽しみにしてまいりました。

お体をお大切に、これからもお元気でいらっしゃってくださいませ。

■室井先生へ

中川史紀子（社）海外と文化を交流する会理事

室井先生、謹んで卒寿のお祝いを申し上げます。ますますのご健康をお祈りいたします。

私は、1994年に入会して以来、先生から沢山の忘れることのできない素晴らしい思い出をいただきました。場所は京都新聞社—交流社—銀座教会と替わりましたが、例会の度に先生は、穏やかな笑顔で為になるお話をしてくださいました。マーケティングという私の全く知らなかった学問のことから、日本の将来を考えることまで、本当に勉強になりました。

また、奥様とのお仲睦まじくいらっしやったことは、とても印象に残っています。私もそうありたいと願っています。

どうぞこれからもお元気でいろいろ教えてくださいませ。

卒寿バンザイ!!

■室井先生へ

松田洋子（社）海外と文化を交流する会理事

「室井先生はご出席かしら？」期待と不安を胸に月一回の理事会に伺ったものでございました。結果はいつも「あーあ良かった!!」。お優しい笑顔が迎えてくださいました。どのような事柄も柔軟に受け留めてくださる広いお心と、問題解決に際しての深い知性・知識にはいつも感動いたしておりました。そして善き時代を心豊かにまっすぐ歩んでこられた凛としたお姿に、思わず襟を正すこともしばしばでした。

また、つい最近帰宅時に地下鉄で一緒になったことがございました。先生は、座席にお座りになると、本を取り出し熱心に読んでおられました。私は一足お先に降りることになり、人混みの中、少し離れた所からご挨拶をいたしましたところ、ちょっと帽子に手をかけられ会釈を返してくださいました。その“ダンディ”なこと。お上品で辺りを払う威厳があり、本当にかっこ良かったです。

先生!!いつまでもお元気で、皆に尊敬される先生、ダンディな男性でいらしてください。

■「思い出」

本田朋子（社）海外と文化を交流する会理事

はじめて室井先生にお目にかかったときの印象は、紺色がお似合いの「ダンディな江戸の紳士」でした。以降、理事会、勉強会等の折に、さまざまなお話を拝聴する機会をいただきました。いつでも会の為に大きなお力を注がれるお姿に接してまいりまして、私共が今日在ることに感謝申し上げるばかりですが、なんといつてもその存在感そのものの尊さを実感しておりました。ところが今、先生のお顔を想い浮かべますとき、何故か、ふとした日常のお話の楽しさばかり大きくふくらんでまいりますので振り返ってみました。

◎秩父のほうの神社仏閣には、なかなか由緒正しい立派なものがあるね。……………云々。

◎近頃のお葬式で、派手な衣の僧侶が大勢行列しているのがあって、「〇〇道中」ではないんですから。あれは駄目ですよ。

◎近くのさかな屋がサンマを上手に焼いて、熱々を届けてくれるの。いいもんです。……等々

書き始めますと、次から次へ浮かんでまいります。大切なことは忘れてしまいますのに困ったものでございます。私がかたがた先生のお生徒だとしたら、落第生であることは明確なのですがそれでも、幾つになっても、講義に通い続けるであろうことも明らかです。何事にも丁寧な先生のお人柄に魅せられて、私自身も、なにかお手伝いできることは、と過ごした数年は本当に、お目にかかることが楽しみでございました。

これからも、会報にご寄稿をいただけますことをお待ちしております。どうぞいつまでもお健やかに過ごしていただきますように心よりお祈り申し上げます。

ありがとうございました。

■室井鐵衛先生への感謝のメッセージ

松岡恒太郎（社）海外と文化を交流する会理事

会は幾多の困難な時を乗り越えここまでくることができました。

室井先生はこのような中であって、正しい方向を指し示すライトハウス（灯台）の存在そのものでした。それは決して車のサーチライトのような強烈な光ではなく寒い季節には蜜ろうそくのように心温まる、また暑い時期には清々しい光をこの会に連なるすべての人々に照らし続けてくださいました。留学生の皆さんへの温かい眼差しはいつまでも忘れられません。

室井先生はコンサートの際など

「いやー恒太郎さん、しばらくでした！」

と私を見ると声をかけてくださいました。

またこの言葉をかけていただけるように、会の活動をサポートしてゆけたらと考えております。

先生、卒寿本当におめでとうございます。

これからもどうぞお元気で。

■サッカーの大先輩

中野真逸郎（社）海外と文化を交流する会理事

私は早稲田大学ア式蹴球部（サッカー部）の出身である。サッカー早慶戦の相手は慶應義塾大学サッカー部（サッカー部）で、なんと室井先生は、慶應サッカー部のご出身だった。もちろん25歳ほどの年齢差があるので、同じグラウンドで戦ったことはない。だが、サッカーでも大先輩であったことから、ますます親近感を抱いていた。

コピーライターという職業がある。広告文案を考え、書く。なにやら「カッコいい」ように思えて、20歳過ぎでコピーライター養成講座に通ったことがある。学ぶことが嫌いな私は、やはり通いきれなかった。だが、受講料は払っていたので、いちおう、卒業となった。そのときに分厚い『マーケティング』の本をもらった。その著者が「室井鐵衛」なのだった。

「海外と文化を交流する会」に入会したのは、中学高校でずっとサッカーFWコンビを組んでいた現常務理事の大谷俊介さんの手伝いをするためだった。そして室井先生が会長として、熱く理想を語り、会を指導なさっていた。共感できる姿勢だった。先生とはサッカーの話をしたことがない。でも、サッカーのスタイルはなんとなく想像できる。サッカーで嫌われるのはアンフェア、サッカー選手はフェアを目標とする。先生の、人生観・哲学と同一ではないかと拝察するのである。

室井先生のますますのご健勝を、強く祈念する。

■卒寿の室井鐵衛先生とのますますの縁の深まりを願って

佐藤純一（社）海外と文化を交流する会顧問

室井先生、このたびは卒寿をお迎えになりましたこと、心からお祝い申し上げます。

ヒトを「人間」ということの意味は、人間は孤立して生きていくことはできず、実際我々の日常を見ても、

多くの人間の関係によってはじめて生を営むことができるが故に「間」という字があるといわれます。これを哲学者和辻哲郎は、間柄の哲学に展開しました。

私と室井先生とのこの間柄を振り返ってみますと、出会いはさほど古いものではありません。たまたま縁あって哲学、環境関係の雑誌の編集に関わることになった六年ほど前に出版社でお引き合わせいただいたのが始まりでした。その後、間もなく海外文化と交流する会に参加させていただき、しばしばお会いする機会をいただいて、会の活動はもちろん、先生のご専門の経営学、戦後の日本復興期の活動、最近の日本の企業の問題と将来など深いご経験に立たれた含蓄のあるお話をうかがったりして、みるみるうちに縁が深まってまいりました。

私は、人間の間柄、あるいは縁の深まりは、人間の関係している物理的な長さによっては測られるものではなく、極論すれば目と目があった瞬間にさえ人間同士の全体的理解や信頼が形成され、そこまではいかずとも出会いの後いかに間柄を緊密進化させていくかにかかっていると信じる一人であり、室井先生との出会いとその後いろいろお教えをいただいております縁の深まりはまさにそれが現実となったものです。

仏教では大道無門という言葉があります。私が私淑いたしております先生からお教えいただいて、私なりに理解しているところでは、人それぞれに仏に到る道は大道であって、恰も山の頂上を極めるには東西南北いずれから入っても登る努力をすればいずれも頂に達することができるということの意味だそうです。

室井先生は、お聞きするところでは、人生の門を時事通信社の記者として入られ、敗戦後は廃墟からの占領軍による日本の経済復興、その後ヨーカ堂をはじめとする企業経営、さらにそれまでの実践を踏まえて東京国際大学、慶応義塾大学で経営学の研究、教育と多様にして幅広く人生を登ってこられました。他方、私のほうは先生が復興に尽力された復興のめどが立ったあと、昭和40年代に入った重化学工業化による高度成長期に技術者の道に入り、化学工業でアルミニウムやセラミックスの製造を中心に、山道でいえば、先生からほぼ20年あまり下を登ってきました。

こういう道を歩んできた私にとって、先生との出会いには大きい意味が二つあります。一つは、先生は山に入られたのは、新聞記者、経済政策担当官、経営者、経済学者といういわば文の門、私は技術者、工学部の教授という理の門と異なっていることです。この違いと、人生経験の差が、私にとって本当に大きな意義があったのです。それは、製造技術者として、技術開発や製造成績の競争に没頭する傍ら思い悩んでいた問題、すなわち自分の関わっていることが、社会や環境に如何に貢献しているのか、公害、環境への製造業の影響がこのまま進むとどうなるのか、世界の貧富のアンバランスは解決の方向にいくのか拡大の方向にいくのかといった現代技術の影の問題に対して、単なる「理」の立場ではなく、「文」の立場、即ち先生の領域の経済政策、経営、地域マーケティングといったことをお教えいただいたことで、私の新しい視野が大きく切り開けました。

さらにここ二、三年来、お会いするたびに、現在の日本のビジネス道德の崩壊状態を憂えて、日本の伝統的な商人道を復興すべきことを熱く訴えられてこられました。昨今の状況を見るにつけその慧眼に感服いたしている次第です。

もう一つの先生との出会いの意義は、先生との山の位置関係にあります。私が五合目にいるとすると先生は七、八合目、いやもっと人生の高みに達しておられます。この立っている人生の高みこそ、人や社会を見るまなざしと視野の開けを根本的に違えるものであると思います。私などは、視野どころか目前だけしか見ずに、ただフウフウいって歩いているだけで本当は自分がどこへ向かおうとしているのか分からない状態です。そのような中で室井先生からいろいろな体験や人との出会いをお聞きし、私のそのときの状況に引き当てて反省する大きい示唆をいただいたことは本当にありがたいと常に感謝いたしております。

先生は、卒寿という人生の高みに立たれましたが、さらにさらにより高みに立たれ、そこからでしか見えないこと分からないことをもって、後に続いております私どもに語り、教えていただくようお願いする次第です。

改めまして、先生の卒寿を心からお祝い申し上げます。

平成 19 年 3 月 17 日

■卒寿おめでとうございます

渡辺いつ子（社）海外と文化を交流する会企画委員

室井先生、卒寿おめでとうございます。

私が初めて室井先生ご夫妻にお目にかかったのは、中国の留学生を囲んでの「キッチン交流」でした。とても素敵でお優しく、初めての私にとりまして、奥様のお優しいお心遣いが忘れられません。そのとき、先生が中国と日本に関する歴史的なお話をしてくださり、興味深く拝聴させていただきました。それからは、お目にかかるたびに必ず良いお話をしてくださるので、とても楽しみにしています。

この度は、ご本を私にまでくださりまして感謝しております。ありがとうございました。

どうぞお元気で過ごしてくださいませ。

■室井先生へ贈る言葉

岩田貴子（社）海外と文化を交流する会会員

室井先生の素晴らしいところは、たんに偉大なマーケティング研究家でいらっしゃるだけではないということです。先生にご指導を賜るようになってから何年にもなりますが、先生の深い教養と歴史観、そしてそのお人柄にいつも感銘いたしております。室井先生の教えの何分の 1 にもなりませんが、ご指導いただいたことを、後に続く若い人たちに少しずつでも伝えていけたらと思っております。今後とも日本の未来についてどんどんご提言いただければ幸いです。

■室井鐵衛先生おめでとうございます

井川重夫（社）海外と文化を交流する会会友

室井先生 寿の御年をお迎えになり、心からなるお祝いを申し上げます。小生にとりまして大先輩の先生に初めてお目にかかった印象は、今の小生にとって大きなアドバイスを戴いたことでした。自由に語り、自由に耳を傾け、しっかりと今を受け止める。若い小生の方がよっぽど頑固なのか、その当時書かせていただいたものを読み返し感じています。

これからもお元気で 自由をお楽しみください。そして私達に語ってください。

重ねておめでとうございます。

■室井先生の新しい門出

山田悦弘・雅子（社）海外と文化を交流する会理事

先生、長い間、お疲れさまでしたと、申し上げるのが当たり前ですが、私どもは、敢えて先生の「新しい門出を祝って」と書かせていただきます。

先生の足跡、業績については、他の皆様方にお任せいたします。

そのことは私どもが触れるまでもなく、皆さま周知のことですので、若輩がとかく触れることを遠慮させていただきます。

私どもが敬服いたしますのは、先生の常日頃の、柔和で温厚なお人柄です。

いつお会いさせていただいても、温かい笑顔で接してくださり、お会いした後でもその余韻が馥郁と残ります。

数年前、私どもの子供のことでご相談させていただいたときも、ご足労をおかけして、適切で親身なアドバイスを賜り、たいへん感謝しております。このたび後進に道を譲られるとのことですが、卒寿より新たな門出と思って、お体のこともありますが、決して無理をなさらずに、まだまだ多少頼りない我々のために、いままで同様のアドバイスをしてくださるようお願いいたします。

その意味で、先生の「新しい門出を祝って」と敢えて書かせていただきました。

■贈る言葉

西山昌子（社）海外と文化を交流する会員

当会の理事であった主人の体の具合が悪くなった時、この会のことは室井さんに、とお願いしお引き受けいただいてから10年という年月がたってしまいました。

コンサートなどでお見かけする室井さんはお年を感じさせず若々しく思えて、いつまでも会長でいてくださるよう思えておりました。先日、松岡さんから郷里に戻られると伺い、月日のたった事を実感しております。この間、私利私欲なく、高い教養、そしてそのお人柄で大所、高所からこの会を導いていただけたことを感謝しております。天国の主人と共に“ありがとうございました”と心から御礼申し上げたいと思えます。

今後は郷里でも室井さんのお力を必要とする人達のためにも、いつまでもご壮健で、更なるご長寿をお祈りしております。重ねて、重ねて、ありがとうございました。

■室井鐵衛先生

岡田岳郎（社）海外と文化を交流する会会友

室井先生の卒寿を迎えられるにあたり、謹んでお祝い申し上げます。私事になりますが、学生時代から今日まで、先生からは沢山の恩顧をこうむり、また、ご庇護を賜り、深く感謝しております。

先生の卒寿という歳月の間には、多難な風雪に耐えてこられたばかりでなく、学術的にも社会的にも立派なご功績を挙げられました。

これは、私の何よりも喜びであり誇りとするところです。

先生からは、緑豊かな松ノ木のご自宅にお伺いしたり、我が家に来ていただいた時に必ず歴史の勉強を大切にするようにと教示をいただきましたが、将来もこの言葉を大切に学んでゆく所存です。

今、ご夫妻共にご健康でおられることも私の喜びとするところで、「おめでとうございます」の言葉を心から捧げ、この上のご長寿とご多幸を心より念願している次第です。

平成 19 年 4 月 吉日

日本画

■ニュージーランドの日本画

松岡裕子（社）海外と文化を交流する会専務理事

山田悦弘理事夫妻がニュージーランドへ旅行なさるとの情報を耳にして急遽、Gish 会長はメルボルンの芸術省と日本領事館に紹介要請をして、南島のクライストチャーチにあるカンタベリー博物館館長および現地日本領事館宛に山田夫妻訪問の希望とスケジュール表を送っていただきました。お蔭で準備万端が整えられての Canterbury Museum への山田夫妻による表敬訪問が実現したのです。オーストラリアに続いての日本画 16 点贈呈は 1981 年 3 月のことでしたが、オーストラリアと同じ轍を踏みたくないと思うがゆえに、これまでも新婚旅行を含め 6 名ぐらいの方がクライストチャーチへ旅行すると聞くや、特にお願いして貴重な日本画の安否を問いに Museum を訪れて館長に会ってもらいました。しかし、ここ 10 年以上は空白状態が続いていました。この度の山田ご夫妻のご好意により、初めての理事訪問が実現したことは会にとって大変喜ばしいことでした。



カンタベリーミュージアムの入り口で



ニュージーランドの寄贈した日本画を前に

当日の 3 月 12 日夜、山田雅子さんからの電話で、「2 点の日本画は常時展示されてる。残りの作品全ても箱に収められていて、保管状態も良く、額縁は無傷だと平川領事共々確認できた。保管主任の女性にも会えた」ことなど知らせていただきました。下記に日本領事館員による、そのときの報告が述べられています。

山田悦弘ご夫妻によるカンタベリー博物館訪問

親愛なる Gish 様